

生徒の主張を受け止める度量

2025・6・25 重枝 一郎

「生徒に学ぶ意欲をもたせ、考える力を育てる」という言葉は、昔から、各教科がよく使っていたフレーズである。以前から、このような「主体的学習」は目指されていた。確かに、学ぶ主体は生徒であり、働きかける主体は教師である。しかし、多くの教師が、教え込み教育からの脱却に悩む。あまりにも「個性尊重」とか「のびのび教育」というものに力を入れすぎると、短時間に効率よく指導することが難しくなったり、知識の定着ができなかったりするからである。その結果、「詰め込み教育」が復活する。

1行目に書いた、「生徒に学ぶ意欲をもたせ、考える力を育てる」について異議を唱えるものはいない。なぜそこに素直に向かえないのか。原因は、教師の指導の仕方がある。以下の授業中の教師と生徒のやり取りは、小学校の算数の研究授業の指導助言者をした時に経験した場面である。

「お母さんから200円あずかって買い物に行きました。はじめの店で95円の缶詰を買いました。次の店で30円のノートを買いました。帰りに30円でおやつを買いました。お母さんにおつりをいくら返したでしょうか」という問題文。

Aさんは、すぐ「はい!」と手をあげた。先生に「前でやってごらん」と言われ、黒板に次のように書いた。 $200 - 95 - 30 - 30 = 45$ こたえ45円。(ほめられる)

Bさんが、「違うやり方でできました」と手をあげた。同じように黒板に書くように言われ、次のように書いた。 $95 + 30 + 30 = 155$ $200 - 155 = 45$ こたえ45円。(ほめられる)

日頃やんちゃでよく注意を受けるCさんが、AさんBさんと、自分も同じように認められると期待して、「はい!はい!私もできました!」と叫んだ。AさんBさん以外のやり方の人は他にはいなかった。先生は、「黒板に出てやってごらん」とはCさんには言わなかった。先生は、「Cさんにはできないだろう」という表情で、しゅしゅCさんのノートを見にいった。ノートを手にし、それを見て、「もう一度考え直してみて」と言い、ノートをCさんに返した。

Cさんは、「考え直せって、これ以上考えられん!」と言って、その後やろうとしなかった。授業が終わり、みんな教室を飛び出していく。でも、Cさんは座ったまま。「もう算数なんてやるか」と。Cさんのノートには次のように書かれていた。

$100 - 95 = 5$ $100 - 30 = 70$ $50 - 30 = 20$ $25 + 20 = 45$
こたえ45円。(Cさんの解答わかる?)

当時の研究授業は、授業者が、事前に予想した生徒の反応を集め、それを生徒に出させ、教師がまとめ、ちょうど終業のチャイムが鳴るのがいいとされていた。このCさんの解き方は、おそらく授業者の想定外であった。しかも、指導案通りになるのがよい授業という気持ちが強すぎたと思う。

改善点を言うと、①Cさんが考えを出したことをほめる ②板書させ、みんなに見せる ③Cさんに自分の考えを発表させる ④教師は共感する ⑤Cさんに友だちと学び合う喜びを感じさせる。つまり、Cさんの発言を受け止める教師の度量をもつ。

「よい授業」とは、①自分の考えをもつ ②自分の考えを主張する ③人の考えをよむ ④人の考えを認める(共感的態度) ⑤人と学び合う(共学的態度)

この「よい授業」は、約40年前に、初任者研修で聞いた内容である。
おそらく、今も不易の部分である。